

# 「今の翁、まさにしなむや」

——伊勢物語四〇段を読む——

吉 山 裕 樹

ここに取りあげてみようと思う伊勢物語四〇段は、章段末尾に「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや」と云う批評的言辭が書き込まれている事もあって、多くの方々によって論ぜられている章段である。たとえば、この四〇段を中心に取りあげた論考に、福井貞助氏「伊勢物語第四十段と掃墨物語」(『国語と国文学』第二十八巻第六号、「伊勢物語生成論」所収)、市原愼氏「伊勢物語四十段攷」(『伊勢物語生成序説』第一章第六節)があり、他にもこの四〇段にふれた論考は多い。

かような章段を非力な筆者が取りあげる要もないのであるが、最初にこの章段を読んだ時から通行の注釈書に少し飽き足らないものを感じていたと云ういきさつもあって、筆者の考えをまとめて置くために稿を成す事にさせていただいた。

○  
まず、四〇段の全文を定家本によって掲げて置く(引用は天福本を底本とした日本古典文学大系本による。なお、表記を改めた箇所もある)。

むかし、わかきをとこ、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへおひやらむとす。さこそいへ、まだおひやらす。人の子なれば、まだ

心いきほひなかりければ、とゞむるいきほひなし。女も卑しければ、すまふ力なし。さるあひだに、思ひはいやまさりにまさる。俄に親この女をおひうつ。をとこ、血の涙をながせども、とゞむるよしなし。率て出でていぬ。をとこ、泣く／＼よめる。出でていなば誰か別れの難からんありしにまさる今日はかなしも

とよみて絶えいりにけり。親あわてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに真実に絶えいりにければ、まどひて願たてけり。今日の入相ばかりに絶えいりて、又の日の成の時ばかりになんからうじていき出でたりける。昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや。この段は、物語の叙述とそれに続く末尾二行の「昔の若人は云々」と云う作者の自注的部分に二分する事ができる。これは、「昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける」と云う記述を持つ初段の物語の形式と軌を一にしている。四〇段と初段の關係については考えねばならない事が多いが、追々ふれて行く事とする。さて、この稿の目標は「昔の若人は云々」の記述をいかに把握するかにあるのだが、その前提としてまず物語の内容を検討する事が前提となる。以下物語の中身を考察して行きたい。

○  
伊勢物語の主人公は、「昔、男」と書き出されているように、単に「男」とされる場合が多い。ところが、この四〇段では「わかきをとこ」と、「わかき」と云う形容が付されている。これは、後文の「人の子なれば」「昔の若人は」と云う記述と対応し、物語の内容と切り離せない設定となっている。

伊勢物語の中では他に、六五段の「まだいとわかゝりけるを」、八六段の「いとわかきをとこ」、それに初段の「うゝるかゝりして」などが主人公を若者に設定した例としてある。

六五段の物語は「在原なりける」若い男が天皇の召された女性に懸想する話である。男は「女方ゆるされ」ているので、女が男の露骨さを嫌うにもかかわらず、「思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ」と詠んで、女の行く所どこにでもつきまとう。そのうち、男もかような有様では身の破滅だと反省するに至り、「わがかわる心」すなわち「すき心」をとどめようと仏神に祈り、「陰陽師、巫」を呼んで祓をする。しかし、いっそう女が恋しく思われるのみで、結局「恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」と詠む結果に終わる。物語はこのあと、男が流罪に処せられ、女も蔵に込められた事、男はそれでもなお流された国より夜毎女の込められた蔵のあたりに通つた事などを記す。この六五段の「いとわかゝりける」と云う主人公の設定は、自分の「すき心」をまだ十分に制御できない男と云う事を意味しているものごとくである。

八六段の物語は、今は疎遠になっているが、「いとわかき」頃好

意を抱き合っていた女に、男が「今までにわすれぬ人は世にもあらじおのがさま／＼年のへぬれば」と呼びかけてみたが、そのまま仲は進展しなかったと云う話である。好意を持ち合っていたのに仲が途絶えた原因として、「おの／＼親ありければ、つゝみていひさしてやみにけり」とある。この段の「いとわかきをとこ」と云う設定は、親の意には逆らえない男と云う事を意味しているようである。

六五段・八六段ともに、若い男と言っても「いと」と云う形容が付されているので（特に六五段では「女方ゆるされ」ているとあるので元服前と考えられる）、四〇段にそのまま当てはめる事はできないが、四〇段の「わかきをとこ」は、六五段の自分の「すき心」を自制できない、八六段の親の意に逆らう事ができないと云う二つの面をとくに合せ持っていると言える。その二つの面は、「すき心」ゆえについては失神してしまう男の姿、「人の子なれば、まだ心いきほひなかりければ」親の措置に抵抗できない男の姿に現われている。ところで、この四〇段の男は「一休何歳ぐらの年であるうか。「人の子」と云う語は、この場合若いと云う事も示しているが、八四段の年老いた母親にあてた男の「世の中にさらぬ別れのなくもがな千世もといゆる人の子のため」と云う歌の例と同様、親と云う存在を強く意識した意味合いが濃く、必ずしも年齢を導き出せるものではないようである。

多くの注釈書はこの事にふれないが、契沖の「勢語臆断」には、「人の子なれば、まだ心いきほひなかりければ、とゞむるいきほひなし」と云う部分に「上にわかき男といひて、今人のこなればといふは、元服のほどなるべければ、心も強くさかりならぬ故に、儀一

勢をなしてもえとめぬなり」と注している。契沖が何を根拠に「元服のほど」と捉えたのか明らかではないが、物語に表われた男の態度がどうみても恋に慣れていない、良く言えば初々しく、悪く言えば未熟なものである事がその根拠になったのではないかと推測される。また、先にもふれたこの四〇段の物語の形式と軌を一にする初段が、「うゐかうぶりして」と元服間もない男を主人公にしている事が参考になったかも知れない。池田亀鑑博士編「源氏物語事典」によると、元服の年齢は「大休、天皇十一〜十五、皇太子・親王十一〜十七、臣下十五〜二十歳ごろに行われる」（藤岡忠美氏執筆）とあり、この四〇段の場合も一応「十五〜二十歳」あたりの男と考えてよいであろう。

それにしても、当時の慣例から言って、家で召使う女に手を出すくらい的事それ程問題にもならなかったのではあるまいか。だが、この男「思ひもぞつ」きそうに真剣になる。これはまことに「純真」としか言いようがないが、当時の世間的「常識」から言えば分別がないとも言える。かような行動をとって不思議はないと云うのが「わかきをとこ」と云う設定の意味でもあろう。

○  
右のような男に配するに、女は「けしうはあらぬ女」であり、親は「さかしらする親」である。これで役者は出揃う事になる。

「さかし」は「源氏物語重要語句詳解」「解釈と鑑賞」第二十四卷第十二号・源氏物語ハンドブック」によると、「頭脳の良さを表わすことばではなく、判断のしっかりしていること、理性の勝った性格、気丈な性質、しっかりとすきのないことなどをいう」語とさ

れており（河辺名保子氏執筆）、これは松尾聰氏・日本古典文学大系「浜松中納言物語」の補注でふれられているように、従うべき見解であろう。この「さかしらする親」の場合も、息子の将来を勘案して理性的に処理しようとする態度を示すものと思われるが、それが「さかし」でなく「さかしら」に過ぎなかった事は、後文の「あわてにけり」「まどひて」と云う結果に露呈されている。

次に、女についてであるが、「けしうはあらぬ」は、前掲「源氏物語重要語句詳解」によると、「現代語でユカシクモナイ、ワルクハナイといった感じと一致」し、「何か手放しに賞められないような場合」に使われると言う（河辺名保子氏執筆）。この四〇段の「けしうはあらぬ」は主に容貌について言ったものと受け取れるが、伊勢物語では女の容貌について言及される事は殆どない。数少ない例のひとつとして初段の「いとなまめいたる女はらから」があり、こ

こでも初段と四〇段の相似た性格を見る事ができる。  
しかし、女の人物設定で問題となるのは、後文の「女も卑しければ」の方である。現行の注釈書の中にも、女を奴婢の身分とするものもあるが、四一段の「いやしきをとこ」は「緑衫のうへのきぬ」とあるように六位であるし、八四段には「身はいやしなながら、母なん宮なりける」と云った記述も見られ、「卑しければ」が必ずしも奴婢を指したものと見えまい。この「卑し」は男に対して、或いは男の家の家格に対しての相対的なものと見る方が無難であろう。

○  
さて、「女も卑しければ」と云う記述の重要さは、この物語が身分造いの恋を叙したものである事を示す点にある。伊勢物語の中に

は身分違いの恋を描いた章段がいくつもあるが、すでに指摘されているように、多くは女の方が身分が高い（片桐洋一氏『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』。「いやしからぬをとこ、我よりはまさりたる人を思ひかけ」た八九段もそうであるし、「をとこ、身はいやしくて、いとになき人を思ひかけ」た九三段もそうである。その九三段には「臥して思ひ、起きて思ひ、思ひわびて」と云う表現が見られるが、これはいわゆる「二条后物語」の四段の「立ちて見、ゐて見、見れど」と云う表現と共通性を持つと指摘されている（片桐洋一氏『伊勢物語の研究（研究篇）』。大休「二条后物語」四・五段自体が、身分違いの恋を描いた物語の真打的存在として把握でき、九三段の物語は「二条后物語」の内容面、それに表現面をも踏まえて作られたものと捉える事もできる（片桐氏・同上参照）。

「二条后物語」四・五段は、著名なものであるから原文の引用を省くが、身分違いの恋を描き、仲を割く存在として女の住む家の「あるじ」を設定している。男が女の許に密かに通っていたが、それを聞きつけた「あるじ」がその逢瀬を妨げる。そこで男は歌を贈り、その歌の功德によっていったんは「あるじゆるしてけり」となる（五段）。しかし、やがて女は「ほかにかくれ」てしまい、一年後男は女の住んでいた邸宅に出かけ、悲嘆にくれた歌を詠んで「泣く／＼帰」る事になり（四段）、結局悲恋に終わる。かように身分違いの恋、その仲を割く存在、女が男の前から姿を消す事、悲恋に終る事など「二条后物語」と四〇段に共通する面は多い。また、四〇段の作者の強調する「すける物思ひ」も、「二条后物語」に見える一年後まで女の事を思って物思いにふける男のありようと共通するも

のである。

かような共通性を考えると、四〇段の物語は、先の九三段と同様「二条后物語」四・五段を前提に作られたものではないかと思われる。四〇段では身分関係が逆転して男の身分が高くなっているのであるが、その違いこそが四〇段の物語の新しい趣向として意識されていたのかも知れない。

四〇段の物語については、従来「物語作者の実話を聞いて、自身の胸をとおして書いたものと思われる」（窪田空穂氏『伊勢物語評釈』）と云う見解や、古伝承によるものとする意見（市原憲氏・前掲論考）などがある。だが、先述のごとく四〇段は、身分違いの恋、「すける物思ひ」と云った觀念が作者の脳裏に先行した創作性の強い物語と捉える事もできると思われる。この事については後述する。

### ○

ところで、この四〇段には諸本によって大きな異同が見られる。すなわち、伝本によっては女の歌を持つものが存在する。この事については福井貞助氏（前掲論考）や市原憲氏（前掲論考）などが詳しくふれておられるが、ここに一例として伝民部卿局筆塗籠本の該当部分を掲げて置く（伝肖柏筆本、或いは広本系統の伝本などでは女の歌の位置に異同がある）。

（略）  
ぬれ。女返人につけて

いつこまでをくりはしつと人とはばあかぬわかれのなみだが  
わまで

をとこなくよめる。

いとひてはたれかわかれのかたからむありしにまさる今日は  
かなしな

とよみてたへいりにけり。をやあはてにけり。(以下略) (大  
津有一氏編『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』所収のものに  
よった)

福井氏や市原氏などが指摘されているごとく、この女の歌は後の  
増補と考えられ、本来は女の歌を含めぬ定家本の形であったとして  
よかるう。問題は、なぜ女の歌が加えられたのか、と云う事にある。  
この点に関しては、市原氏が「物語中における女性の位相の低さか  
らくる偏向を」正そうとしたとされている(前掲論考)のが、一応  
妥当と思われる。だが、「物語中の女性の位相の低さ」を正そうと  
するのであれば、他の同様の章段にもかような増補が見られてい  
はずであるが、必ずしもそうはなっていない。したがって、四〇段  
には、特に増補を誘導させるようなもの、享受者に不満を抱かせる  
ようなもの、何か欠けているものがあるのではないかと思われる。  
これと似た事情が、何度かふれてきた初段の物語にも認められ  
る。初段は、元服間もない男が、平城京の春日の里に狩に出かけ、  
そこで「いとなまめいたる女はらから」を垣間見して、狩衣の裾を  
切つて歌を書いて贈る話である。その部分を引用して置く。

(略)をとこの著たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてや  
る。そのをとこ、しのぶずりの狩衣をなむ著たりける。  
かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず  
となむをいつきていひやりける。ついでおもしろきことともや

思ひけん。

みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなく  
に

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなん  
しける。

この二つの歌のうち、「みちのくの」の源融の歌(古今集七二四  
番)は、「かすが野の」の歌を説明するために作者が自注的に引き  
合ひに出したものである。それを室町期の「肖聞抄」などは女の返  
歌と捉えている。かような捉え方は平安朝まで遡れるようで、業平  
集の一本である雅平本業平集は、この初段の歌を採録するに当つて  
贈答歌として収めている。これは明らかに誤りであるが、かような  
誤りを誘発する要因が初段の物語にはあつたと思われる。それは、  
四〇段の場合と同様、享受者に物語の流れとして当然「女はらか  
ら」の返歌があつて然るべきだと予測させるものであるにもかかわ  
らず、そうはなっていない事にあると考えられる。要するに、初段  
にしても四〇段にしても、物語の展開が必ずしも十分に尽くされて  
いない印象を与えるのである。

ではなぜ、かような印象を与えるものとなつたのであろうか。こ  
れは、両段が末尾にそれぞれ「いちはやきみやびをなんしける」「さ  
るすける物思ひをなんしける」と云う記述を持つている事と関係が  
あると思われる。すなわち、ともに「いちはやきみやび」「すける  
物思ひ」と云う観念が先行し、その観念をもって形象化された男  
がそれを実現すれば、物語はそれ以上叙述される必要はなかつたの  
ではないかと思うのである。かように言うと、四〇段で男が絶え入

った後観が狼狽するさまや男が息を吹き返した事などが書かれているのはどうなのか、と云う異論も出てきそうであるが、これは、主人公である「男」が最終段で辞世の歌を詠んでこの世を去る前に死ぬ事になってはまずいと云う事情によるものであろう。

四〇段には、物語の展開だけではなく、歌にもいささか問題がある。たとえば、本居宣長は「玉勝間」の中で「出でいなばたれか別れの云々、此哥、上と下と縁なし、又はしの詞にもいとうとし、真名本に初ノ句、いとひてはとあるも聞えず」（五の巻）と述べている。真名本では初句が「いとひては」となっているとあるが、他の諸本でも定家本以外では「いとひては」となっているものが多い。また、古今六帖（三三二〇四番）もそうであるし、続後撰集（八三六番）には「いとひても」となっている。

かような諸本の異同から、藤井高尚は「伊勢物語新釈」で「今のかな本に『いでゝいなば』とあるはさらに聞えず。これはさきの段なる『いでゝいなば限りなるべし』と云ふ歌のはじめを見まがへてふと書きあやまりたるものなるべし」と誤写説を唱えている。確かに、歌を物語から切り離してみた時、諸家の指摘される通り、まことに落ち着きが悪い。その点、「いとひては」の方が意も通りやすく、落ち着きもよい。

「出でいなば」と云う句を持つ万葉集のいくつかの歌（二二六六、三一九八、三四七四番）は、藤井貞和氏が「物語における男と女―色好み小考―」（『解釈と鑑賞』第四十二巻第一号）で指摘されているように、男が旅立つ時の歌のようである。古今六帖にもこの

句を持つ歌が数例見えるが、平安朝の歌には必ずしも多くはない。伊勢物語の中には、この例を除くと、他に三例見える。

出でて去なば心軽しといひやせん世のありさまを人は知らねば

（二一段）

出でていなば限りなるべみともし消ち年へぬるかど泣く声を開

け（三九段）

年をへて住みこし里を出でていなばいと深草野とやなりなん

（二二三段）

二一段の歌は、女が男の許を去る（男が出て行くとする異説もある）時の歌。三九段の歌は難解をもってなる歌で、一応崇子内親王の柩車が邸宅から出て行く事を言ったもの。二二三段の歌は、長年連れそっていた深草野に住む女の許を去る時に男が詠んだものである。三九段の歌は別にして、二二・二二三段の歌はそれぞれ安定した意の通りやすいものである。したがって、「出でていなば」と云う表現が熟していないのではなく、四〇段の歌のことばの続き具合にやはり問題があると思われる。

宣長は、先に引用したように「はしの詞にもいとうとし」と述べているが、観点を變えると四〇段の歌は地の文に寄りかかると度合が強い。初句の「出でていなば」が「率で出でていぬ」を受けている事は、石田稜二氏・角川文庫「伊勢物語」に指摘されている通りである。この歌には諸注に色々と意を補った訳も見られるが、素直に受けると「出でていなば」は、女が自分の意志で出て行ったのならば、「誰か別れの難からむ」と云う意にならう。実際は、他人によって「率で出でて去ぬ」と云う事態だったのだから「別れの難」

い事になる訳である。

しかし、人間の自然な心情としては、女が自分の意志で出て行ったとしてもやはり別れはつらいものではあるまいか。かように考えると、この歌はことばの続き具合が悪く、どうも心情の自然な吐露によるものとは思えないのである。下旬の「ありしにまさる今日」は、地の文に記された事情を抜きにしては分りにくいもので、この歌の自立性はまことに脆弱なものと言えよう。

かような事情は、先程から何度か引き合いに出している初段の歌にも認められる。清水文雄先生の「いちちはやきみやび」(『源氏物語その文芸的形成』所収)は、初段についての卓越した御論考であるが、その中で先に引用した「かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず」と「みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑにみだれせめにし我ならなくに」の二つの歌の関係について、後者は前者の本歌ではなく、証歌に当ると説いておられる。「かすが野の」の歌は、「みちのくの」の歌を証歌として引き合いに出さなければ、恋の歌として享受され得ないと作者自身考えていたと云う事になるうか。物語の中に証歌を示さねばならないと云うのは、やはり「かすが野の」の歌が自立性を持たない事を証していると受け取るべきであろう。歌についても、初段と四〇段には相似た現象が認められるのである。

○  
くどい程初段と関連づけて四〇段の物語を考察してきたのであるが、それには理由がある。その理由のひとつとして、四〇段の作者の輪郭の大体をつかむため、同一の作者の手になると思われる(そ

の事を証してきたつもりである)初段をも参考にしようと思つたのである。

伊勢物語の成立については、何次かに渡って漸次成長してきたとする説と大部分の章段が一次的に成立したとする説とがあるが、どちらの説を取るにしても数人の作者を想定するのが、通説となりつつあるようである。その数人の作者の中で、この四〇段の作者はどのようなタイプの人物だったのであろうか。

先述のごとく、その歌が心情の自然な吐露とは思えない事を考えると、少くとも抒情歌人的なタイプではないであろう。逆に、観念の先行した物語と想定される事、章段末尾に「昔人は、かくいちちはやきみやびをなんしける」(初段)「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける」(四〇段)と云つた説明を加えている事などを考え合せると、どうやら理屈の勝つた人物だつたように思われる。その文章にしても、「そのをとこ、しのおずりの狩衣をなむ著たりける」(初段)と云うのはとつてつけたような挿入であるし、「さこそいへ、まだおひやらす」(四〇段)と云うのも叙述がぎくしゃくとして滑らかさに欠ける印象がある。この事からも、何かごつごつとした理屈屋が思い浮ぶのであるが、これはもう偏向した空想に墮する事になるうか。

○  
論の流れからは少しはずれるが、筆者の考えが及ばない事柄のひとつにふれて置きたい。男が絶え入る場面で、「今日の入相ばかりに絶えいりて、又の日の成の時ばかりになんからうじていき出でたりける」とある。創作性の強い物語と見ると、「入相」「成の時」

と云う時間設定に何か意味がありそうであるが、分らない。「入相」の時刻は季節によって変化するであろうが、男の絶え入っていた時間には九一日と数時間になる（真名本末尾に「時者弥生晦成計流」とあり、これは「和歌知頭抄」に云う「これにんじゅ二ねん三月の事也」と何か関係あるかも知れないが、信するに足りない）。「土左日記」冒頭部分にも「それのとしのしはずのはつかあまりひとひのひのいぬのときに、かどです」とあり、「戌の時」に何か意味がありそうであるが、はっきりしない。ままよ、「絶えいりて」「入相」「率て出でていぬ」「戌の時」のことばのしゃれとでも考えるか、とも思ってみるが、どうも分らない。大方の御教示を仰ぎたい。

○

さて、本稿の目標である「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや」について検討を加えてみたい。この記述については、大きく分けて二通りの捉え方がある。そのひとつは、「昔の若人」と「今の翁」を対比させる捉え方である。「昔の若人」に対して極端に対照的なものとして「今の翁」を出してきたと考える訳である。だが、「若人」と「翁」では比較の意味が余らない事から、「翁」をそのまま老人と受け取るのではなく、「今の、若者らしくない分別くさい若者を揶揄した語」（石田穰二氏・角川文庫「伊勢物語」とする立場も出てくる）。

それに対し、もうひとつの捉え方は、「昔」と「今」、「若人」と「翁」では共通するものがないから比較にならないとし、これは「昔の若人」||「今の翁」であり、同一人物であるから共通点があり比較が成り立つとする。すなわち、「昔の若人」のなれの果てが

「今の翁」であり、翁は若き日の熱情をとほけて頼晦して物語っている（片桐洋一氏「鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語」と捉える訳である）。

前者の「翁」を「分別くさい若者を揶揄した語」とするのは、文脈から言って飛躍があるように思われる。後者の捉え方の方が説得力を持つように思うのであるが、自己の体験を回想して語ったとすると、やはり「さるすける物思ひをなんしける」と「き」ではなく「けり」が用いられているのは気になる。渡辺実氏・新潮日本古典集成「伊勢物語」には、この「昔の若人は」以下の文章を四〇段の物語の提供者（すなわち主人公）の仲間が横から書き加えた揶揄と捉えられている。そこまで考えるかどうかは別にして、「昔の若人」||「今の翁」としても、主人公自身の語ったものではなく、語り手は別にいると見てよいのではないか。語り手が自分の見聞或いは伝聞した話を物語る形式（あくまでこれは形式に過ぎない）と見た方が物語の本性に叶っているとも思うのであるが、今は論を進める用意がないのでこれで止める。

さて、もう一度初段と比較しながら、この「昔の若人は云々」の記述を検討してみたい。初段には「昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける」とだけある。これは、四〇段の「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける」と対応する。だが、四〇段では「今の翁、まさにしなむや」と記述は続く。初段と同様「さるすける物思ひをなんしける」で止めてもいいのではないかとも思うが、そうはなっていない。ではなぜ、「今の翁、まさにしなむや」と云う文章が加えられたのであろうか。

大方の注釈書は、四〇段の物語を「すける物思ひ」が正面切つて称揚されたものとしてゐる。木之下正雄氏の『平安女流文学のことば』によると、「スクは、心が引きつけられる、心が執着する、という心的作用を表わす」とある。「すける物思ひ」は、女に執着して思い悩み、その極み絶え入った事を云つたものであるが、物語の世界ではこれは非難されるべきものではなく、恋に悩む人物が多く物語の中では主人公であるごとく、称揚されて然るべきものである。

しかし、その恋の性格はどうであろうか。これは、家で召使う女に執着した恋である。枕草子の「男こそ、なほいとありがたく」の段（日本古典文学大系二六八段、日本古典集成二五〇段）に「公所に入り立ちたる男、家の子などは、あるが中によからむをこそは選りて思ひたまはめ。及ぶまじからむ際をだに、めでたしと思はむを死ぬばかりも思ひかかれかし」と清少納言は書いてゐる。素暗らしいと思えば、どんなに身分が高くとも恋死にする程「思ひかかれ」と云うのである。これが当時の常識に叶う考え方であり、身分の低い女性に恋死にする程「思ひかか」るのは当時の世間的常識に反するものではないか。

いくら物語の世界とは言へ、家で召使う女に執着して息絶えると言ふ話は、享受者に素直に受け入れられないと作者は考えたものではあるまいか。そこで、「さるすける物思ひをなんしける」と称揚しながらも、「今の翁、まさにしなむや、年をとつて分別のついた翁となつては、そんな無分別な「すける物思ひ」をどうしてしようか、そんな事はもうしないだろうよ、と云う文章を付け加えざるを得なかつたのではないかと思う。ここに至つて、四〇段の物語は、

「いちはやきみやび」を正面切つて称揚した初段の物語とは性格を異にして、屈折した思いを含んだものになつてゐると思ふのである。理屈の勝つた作者の手になつたと考えるとき、そのような屈折して入り組んだ評言が書かれても不思議はないと思ふのであるが、いかがなものであろうか。

ちなみに、「まさにしなむや」には「為なむ」「死なむ」の両説がある。「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける」「今の翁、まさに（さるすける物思ひを）しなむや」と対応していると捉えるとき、「為なむ」となる。「まさに……や」と云う訓詁調の強い表現を考えると、「死なむ」の方がふさわしいとも思われる。今は前者に従つた。

○

筆者は卒業論文を書く時（七年前ぐらいにならうか）に、この四〇段を読んで何か屈折したものがあつたやうな印象を受けた。思い込みと云うのは恐いもので、今に至るまでその印象の方向にそつた読み方しかできないのであつたのである。これは、古典（古典に限らないだろうが）を読む態度として決してほめられたものではない。自戒すべき事である。

しかし、こうしていったんまとも対象化すると、考え方の弱点も見えてくるもので、今後はもつと柔軟に別の視点からの読みもできるのではないかと云う気もしてくる。機会を与えて下さつた光葉会編集部にお礼申し上げる次第である。なお、稿を成すに當つて、稲賀敬二先生から何かと御教示を賜つた。末筆ながら、ここに記して深謝申し上げる。

（本学文学部助手）